

KTK ひゅうまん 京都

No. 557 2023年4月号

編集／京都障害児者の生活と権利を守る連絡会 〒603-8324 京都市北区北野紅梅町85 弥生マンション内
編集発行責任者／池添 素 電話 090-1444-0046 購読料 1部80円 年間購読料1,000円(送料実費)

- P.1 左大文字 あそび
- P.2 常任委員会から 池添 素
- P.3 一人暮らし始めます! 沖田 友子
- P.4 血の染みついたバトン 中村 暁
- P.5 電動車いす「まんまる号」ドライバー日記 山本耕平
- P.6 ジョニーの炸裂日記 ライスチョウジョナ
- P.7 つれづれあらぐさ 中山 恵美子
- P.8 2+2=詩 富士一文
- P.9 障害のある人の権利を守る北障連から 山添 博史
- P.10 365歩のマーチ 安藤 史郎
- P.11 知っ得情報 松本 美津男
- P.12 障害のある人の家族の思い 沖田 友子

左大文字

▲前号で紹介したように、わが国の障害関連法規は、障害をその人の内部にある機能上の制限としてのみとらえ、その程度で等級を決め、置かれた環境と本人の不自由や社会的不利は対象としていない

▲筆者が関与したのは、障害基礎年金の等級認定の問題である。知的障害のある人が障害基礎年金を申請しても、年金不支給となる例は多い▲30年ほど前の広島でのこと。20歳になった知的障害のある息子の障害基礎年金の申請をしたが、3級と判定され不支給となった母親から相談を受けた。不服があれば審査請求はできると伝えると協力を依頼された。その結果は、県(社会保険審査官)への審査請求では棄却されたが、社会保険審査会での再審査の途中、県が訴えを認めて2級に変更したことで支給が実現した▲10数年前に相談を受けた滋賀県の知的障害者通勤寮の例では、従来は支給が認められていたのに、この年に申請した寮生のお大半が年金を受給できなかった。不服申立は棄却されたので大津地裁に提訴し、勝訴(確定)したことで、原告全員は受給できるようになった▲しかし、現在でも旧来の障害認定の枠組みは変更されていない。WHOの障害研究とこれを受け活動と社会参加の制約状況をふまえた障害把握となっている。わが国は同条約を批准したのに、なぜ障害認定方式を改めないのか。

(あそぶ)



「ライオン」
渡辺あふる

常任委員会から

〈何処へ行く日本〉

ものすごいテンポで日本の軍拡が進んでいることを肌で感じる体験を3月末にした。相方が亡くなつて半年が過ぎ、かねてから「いきたいね」と話していた沖縄県与那国島に足を運ぶ機会を得た。京都から移住した、北野白梅町から発信している無言宣伝仲間の山田さんの案内で、知恵と工夫が詰まった島の暮らしのすごさと、そこを土足で踏みじじる自衛隊と米軍の酷さを実感することができた。台湾をすぐそこに見て、自衛隊の基地が出ることだけでも脅威であるのに、日米共同演習では、いつもはのんびり馬が歩く道を戦車が通った。

が進められていることも聞いた。ミサイル基地を作ることとともに、その計画はホントの話。そこに住む人や馬など、日々を営んでいる人や生き物が暮らすなかで、素晴らしい風景が残る、訪れる人の心をとらえて放さない島。島外から来たたくさん残りの人が残り、暮らしている話。私には「帰りをたくさん聞いた。私は「帰りをたくさん聞きた。印象を強めた。誰のために、何のために、この地にミサイル基地を作る必要があるのか？専守防衛などという名目で緊張感を高めることが目的なら、最も愚策だということはない。「東アジア非武装地帯構想」が提唱されているが、沖縄や石垣島、宮古島など南西諸島が軍事の砦ではなく、平和と交流の砦となる運動はもう待った

なし。その始まりは与那国に暮らす人たちとの息の長いつながりを作りだすところからだと強く思った旅。

〈もう一つの恐怖〉

統一地方選挙の前半戦が終わり、京都市議会、府議会のメンバーが決まった。お隣の大阪ではゆるぎない維新政治が健在。その影響力は京都にも具体的に姿を現し、選挙結果として現れた。自民党や共産党の強い基盤を切り崩し、頭角を現してきた選挙結果。これからの京都が今以上に市民生活を切り捨てる市政になれば、保育や教育はどうなっていくのか？心配している場合ではなく、早急にどうすればよいかを考えなくていけない、もう待ったなしの瀬戸際の課題ではないだろうか。

〈総会のお知らせ〉

2023年度の京障連総会は

5月28日(日)10時半から12時まで福祉広場にて開催します。記念講演は昨年急遽キャンセルとなった津止正敏さんです。講演のタイトルは「ケアラ―支援条例の課題と取り組み」です。その後総会を実施します。

京障連の加盟組織は年々減少してきている。どの組織も財政が厳しく分担金が払えないという悩みを抱えて、遠慮がちに「にゅうまん京都」の部数を減らしてくださいと言われる。団体の分担金に頼る組織活動はもう限界が来ている。個人会員(会費千円)も、退職したのとかが、亡くなったのでなどの理由で退会の連絡が来る。これからの京障連の行く末も深く考える時が来ている。どうかご一緒に考えていただきたい。総会への出席をお願いします。

(事務局長 池添素)

一人暮らしが始めます！

沖田 友子（京障連代表委員）

重度の知的障害があり、車椅子の息子の一人暮らしは冬から春へと季節が移り、ダウンコートから薄手のトレーナーへの衣替えも終わりました。半袖Tシャツの出番もすぐそこ、日焼け止めの出番となりました。

日中は4月から体制が整い、生活介護を3か所利用しています。夕方は散歩や食事、入浴を今までと同じ事業所2か所が、そして夜間から朝までの見守りや日中へ向かうための食事や出発準備などを2か所の事業所が支えてくださっています。それぞれの事業所が2名から4名ほどの複数体制であることから、一週間、一月のヘルパーさんの数は、かなりの人数になります。新しいヘルパーさんの名前も覚

えたようで「○○さん」と伝えようと顔を浮かべることができるようになったように思います。たくさんの介助を得て、ここまで一度も体調を崩すことなく元気に生活できていることはたいへん嬉しいです。夜は20時位に「動画を見るのはもう終わり」と布団に入り、よく眠れていて、朝はゆっくり寝ていることもあるようです。

理しています。小さい頃はアレルギーでたくさん制限があり、手作りの食事を続けていたのですが、幸い今も調理することは苦になりません。今週は何を作ろうかと私の気分転換にもなっています。

陽のよく当たる快適なバリアフリーの部屋があり、日中、活動できる場所があること、環境が整ったことと「自由」になったという実感があります。息子も私自身もそれぞれに心が解放されました。縛られるものなくなつたということです。食べる時間、寝る時間、お風呂に入る時間、すべてを自分で決めることができるようになりました。このことが生活に大きく影響しているのかもしれない。今まで気づかなかつたことなのです。

自由になり、どう生活しているのが良いか、日々挑戦している息子の発信を「これで合ってる？」と気持ちを確認して、わからない時は一緒に考える場があり、支援者同士がつながっています。これからはさらにその自由を満喫できるよう、いろいろなことに挑戦していきたいと考えています。

おきたともこ
1960年生まれ。大学時代に障害児のボランティア活動に参加し、家族ぐるみの付き合いが始まる。後に障害者支援施設で働き、約15年間相談員として従事。フルタイムのため障害のある子どもが学童に入所するための運動に参加。現在、生活介護管理者。



血の染みついたバトン

中村 暁（医療ジャーナリスト）

② 闘争継続宣言

しんぶん赤旗が京都府の「施設留め置き」問題を大きく紙面を割いて報じた（2023年3月21日）。これまでも

言いたいのには「医療崩壊を防ぐため」「医療現場を守るため」であれば、あらゆることが正当化されるわけではない、ということだ。

を得ない。それをしないとすればどうしたらいいとおまえは言うのか？ じゃんけんか？ あみだくじか？ 早いもの順か？ 実際、現場の人たちからそうした問いを投げかけられたこともある。私のモヤモヤの核にあるのは、つまり、そういうことである。

ようだよ。「身寄りのあるなし」が生命の選別の基準になったのだろうか。医療ひつ迫を防ぐためなら、家族のない人の生命を家族のある人の生命より軽んずることが正当化されるのか？

地元紙は何度となく報じ、記者たちはそれぞれの視点で義憤のほとぼりするような良い記事を書いてくれた。だが赤旗の報道はコロナ患者の入院調整を一元的に担う「京都府入院医療コントロールセンター」の「トリアージ」に対する疑問と批判を臆せず書ききった。その意味で他紙の限界を突破するものだった。

こう書いた途端、「おまえはなんじゃ」「現場の何を知ってるんじゃ」と反発を抱く人たちがたくさんいるだろう。正直に言えば私自身、1年近く「留め置き死」問題に向き合っていて、モヤモヤしたものを感じ続けている。

しかし臨床にある医師が、自分の患者について入院が必要と判断しているのに、公権力が入院対象とするかしないかを診察もせずに判断したこと（府は否定しているが）。結果、患者が生命を落としたこと。それは病床がひつ迫しようが、医療が崩壊しようが許されることではない。この先に待ち受けるのはデイストピアである。

生命の重みを権力に判定させてはならない。限られた資源の分配を迫られた権力は優生思想的な人間観にすぎない。これは未成熟な権力が習性的に抱える病のようなものかもしれない。即座に解決方法がないからといって、許してはいけないことがある。私は今後も自身のモヤモヤとたたかい、医療従事者の困難に心を痛めながらも、臆せず京都府を告発する。

私もその報道姿勢に学ぼうと思う。新型コロナは5月8日、5類へ移行する。その前に、はつきり書いておくことにした。

パンデミックの渦中で、キャパシティを大きく超えた患者が発生したとき、誰かが「トリアージ」しなければ医療は崩壊する。医療従事者はますます厳しい状況に追い込まれる。行政がどの患者を入院させるべきか優先度を決めるのは止む

京都府保険医協会が2月に公表した施設調査の自由記入欄によれば、「頼れる親族がい

1 京都府保険医協会ホームページ
<https://healthnet.jp/wp-content/uploads/2023/02/a95c564a28ff40639e008c173befdb96.pdf>

きか優先度を決めるのは止む

ません」と言われた施設がある

pdf

4

電動車いす「まんまるくん」

ドライバー日記 ⑫

山本耕平

月曜日の1時限が、精神保健

福祉の原理という私が一番力を入れて
入れている授業です。そこでは、
どんな精神科ソーシャルワーカーとして
育てて欲しいのか懸命に伝えていま
す。この授業が始まる時、電動のま
ま教室に設置されているスロープを進
んでいくところ、角度が厳しすぎ車い
すとともに転げ落ちたことがありま
す。それ以降、まんまる号を手動にし
、学生にヘルプを求めるときにしまし
た。「誰か手伝ってください」と大
声でヘルプを求めると、必ず男子学
生が駆け寄ってくれます。

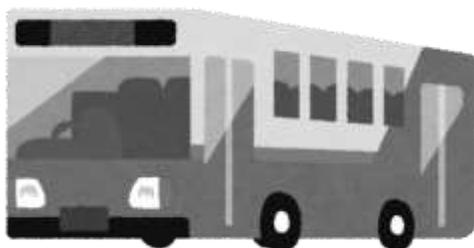
先日、この授業で、困っている人の
なかには「誰か手伝ってください」と
大声で訴えることができない人が多
いと思

い時には、あきらめてしまいい口を
閉ざしてしまうかもしれません。ひ
きこもりの場合、まさに、自身が
助かる社会資源がないために、家
族で頑張らなければならない現
状があるのです。

もう一つ、その背景になっている
ものに他者への「関心」の薄さ
があるのではないのでしょうか。
私は、精神保健福祉の演習で、よ
く学生に「今、中庭のベンチで座
っている人が考えていることを
想像してごらん」とわけの分から
ない課題を提起します。これは、
趣味の悪い行動を学生に強いて
いるのではありません。学生が、
他者に関心を持つことが好きに
なることを目指して行なってい
ます。

私たちが障害者が、
自らの声でヘルプを求めること
が困難になっている背景には、
社会的要因があることを重視す
る必要があります。たとえヘルプ
を求めてもその人を助けること
ができる社会的な資源がな

が困窮している背景には、
しい思いを残すことがあります。
先日、京都駅で6系統の市バス
の乗車し、私が「車いすです。乗
車させて下さい」とマイクで伝え



ジヨニーの炸裂日記16

ライスチヨウジヨナ（イラストレーター）

メディアにおいてコンプライアンスというものが急速に広がっている現代社会だが、どこまでがセーフでどこからアウトなのか、その線引きはいまだに難しい問題である。自分自身にも障害があり、それなりに多様な価値観の元で生きてきた私でさえも、表現する活動をしている立場である以上、尚更悩むことが多い。

3年前から、東京のとあるNPO法人のSNSアカウントにて月一で漫画を連載させてもらっている。単に楽しいイラストを描くだけの仕事ならさほど悩むことはないが、漫画にはストーリーがあり、セリフがある。その中で表現をしていると、時折「こういう言葉遣いは大丈夫か?」「こんなこと描いて不快に

思う人はいないか?」と過敏に思ってしまうことが最近増えてきているのが現状だ。しかもそれだけではない。私が描いているのは漫画の中でもギャグ漫画。読む人を笑わせる漫画である。コミプレイアンスというと、やはりテレビのお笑いの世界でとくに影響が強く出ているし、その関係で最近は「人を傷つけない笑い」の需要がとて高くなっている。となるとギャグ漫画を描いている自分も例外ではない。ましてやNPO法人の依頼ともなると、表現において神経質にならざるを得ないのである。

と、ここまで自分の現状をネガティブに描いてしまったが、私はコンプライアンスに関して守って然るべきという考えで

あることは言うておきたい。ただし、本当の意味で「人を傷つけない表現」、さらに言えば「誰も傷つけない表現」は存在するのか?というところ、これも難しい問題である。もし私がコンプライアンスを徹底的に守った漫画を描いたとする。それを100人が読んで100人全員大丈夫だったとしても、更に1万人が読めば1人ぐらいは不快に感じる人が出てくる可能性は多いにあるだろう。ここまで来れば考えすぎかもしれないが…。

笑いという概念はとても奥深いものであり、だからこそ難しくもある。誰にも見せない漫画を趣味として描くだけなら深く考える必要はないかもしれないが、公に向けて表現をしている以上は自分の作品に責任が伴ってくる。改めて考えると、子供の頃に楽しく漫画を描いていた頃とは全く次元の異なるところまで来てしまったと気付かされる。コンプラ

イアンス的に問題無いと思われるセリフにも「これは大丈夫だろうか?」と必要以上に考えすぎてしまうこともあるが、そのせいで面白さの勢いが殺されることもあるので、気を付けながらも、せいぜいがんじがらめにならないように描いていきたいと思う。



ライスチヨウジヨナ

過剰自己貪食を伴う×連鎖性ミオパチー当事者。京都精華大学マンガ学部卒業。ギャグ漫画描き。Webや書籍などで漫画やイラストの仕事しながら、現在はNPO法人境を越えての公式Instagram じょ『ジヨニーの話』を連載中。ひゅつまん京都では、福祉の視点から表現の分野を考える文章を中心に書いている。

つれづれあらぐさ

場面④ 10年ぶりの、 ショートカットにする

あらぐさ福祉会は長岡京市にある社会福祉法人で、障害のある人たちの暮らしを支える事業を行っています。1986年に無認可の共同作業所を開所して以降、日中の通所から生活の場、ヘルパー事業所等、地域で暮らし続けるために必要なものを作り出してきました。今回の連載開始にあたり、「障害者の喜びと悲しみ、家族の喜びと苦悩、職員の働き甲斐と先が見えない苦悩…そういうことが浮き彫りになればと思います」とお話をいただきました。日々自分が経験していることや感じていることを通して、それぞれの一場面を綴れたらと思います。なお、内容については個人情報に配慮して構成しています。

先日、腰までであった髪の毛を切りました。後ろでくくるひとつ結びから短くなり、会った人それぞれの反応がありました。昼休みにやってくる彼女は、しばらくうちの顔を見て目をパチパチ。なぜか小声で「髪切った?」「すっきの(したなあ)」と話していました。帰りの挨拶に来た彼は、いつもの握手の最中にじーっと目が合って「あれ?!」と一言。じぼくへきえて、「切ったー」と大きな声で言っていました。美容院での手伝い経験がある彼は一瞬誰か分からなかったようですが、「ショートボブにしたんや」と繰り返していました。2週間経った今も、顔を合

たびに「髪切ったん?」「短くなったなあ」と尋ねる人もいます。帰りの道の途中、2階の吹き抜けから、こちらが電話をかけている最中と、いろいろな場面で声をかけられます。「あずみ(映画)」「みたい」と言う人もいますが、実際はショートカットです。自分的には「ピノコ」ブルック・ジャックのイメージだったのですが、くせが強いので「少年アシベ」や「エスパーマジック」に近い仕上がりになりました。特に雨の日は、湿気で広がっています。今回髪の毛を切るときに「短くしたら、どうなりますか?」と尋ねたら、「くせ毛で短いと、まとまりません」と即答でした。分かってはいたものの、「世の中のくせ毛の人は、どうしてるんやろ?」「誰か、うちに合う髪型を教えてくださいな」といってほしいながら、当初の予定通り短く切りました。

切った髪は、ヘアドネーションの取り組みを行っている団体に送りました。寄付された髪の毛は、医療用ウィッグとして髪に悩みを抱える子どもたちに提供されます。ヘアドネーションについては、髪に悩みを抱える人への押し付けにならないかという問題提起があります。ウィッグをつけることへの悩みや葛藤、本当はつけないのにウィッグをつけざるをえない今の社会の状況は、ヘアドネーションでは本質的な解決にはならないということです。団体のホームページには、目指すものとして「必ずしもウィッグを必要としない社会」(JapanHair Donation&Charity)とありました。誰もがなりた

中山 恵美子 (あらぐさ福祉会)

2+2=詩

「既視感」

今の景色をどこかで見たような
けれどもどこか思い出せない
今の音をいつか聞いたような
果たしてそれはいつだったのか

今の景色を見たことがあると、前にも思ったことがある
けれどもはつきり思い出せない
今の音を前にも聞いたと、以前も感じたことがある
それが事実か確信がもてない

小さく異なりながら続いていく同じような日々の中に
紛れ込んでいく、
繰り返されているような風景
繰り返されているような音

ああ、果たしてもう何回、果たしてこれからあと何度
繰り返しているかもしれない世界とその真実を
一瞬捉えたような不思議な感覚が、
僕の中に人知れず溶けていくのだろうか



「変わってしまった」

僕を包む環境は特段良くもないが悪くもない
僕は幸せではない。でも不幸なわけでもない
それで充分なのに、それで満足して終わることは許されない
時間が過ぎる。世界が変わる。時間が過ぎる。人が変わる
望ましいものだったはずの僕の周りは、
気づけば異なるものへと変化して
今のままで良かったもの、あのままで良かったものの、
面影が彷徨うばかり

良くなることなんて望んでいない。
悪くならなければそれだけでいいのに、
時計の針は止まることなく、全ては勝手に進んでいって、
全ては勝手に変わってしまう

「ミノムシ」

ミノムシ。家に閉じこもって
ミノムシ。枝からぶら下がる
風が吹いて家を揺らして
雨が降って家を打っても
ミノムシは黙ったままで
ミノムシはじっと耐えている
いつか空を飛ぶ日を夢見て
いつか来る空を飛ぶ日のために
ミノムシは口を閉ざしたまま
その日が来るのを待っている



作・富士一文 挿絵・水口萌恵

障害のある人の 権利を守る 北障連から

いつの時代も地域とともに

京丹後市にどんな障害のある人も暮らすことができるグループホームをつくる会

事務局長 山添 博史

(あみの福祉会常務理事)

いよいよ最終原稿となりました。このシリーズは、グループホームづくりに向けた運動の紹介という原稿依頼でした。さて、全国や京都では、無認可の共同作業所づくり運動から半世紀を迎えます。長い歴史の中で、法人認可を取得したり、NPOや企業として事業展開をされています。どこも大きくなり、障害者福祉の受け皿として大切な役割を果たしてきました。

同時に地域との繋がりにについても、各法人の理念や綱領、めざすべきものに照らして深まってきたかという点では、厳しい点もあります。その背景には、障害者福祉をめぐる情勢が厳しく、障害者自立支援法(現在は障害者総合支援法)以降、事業そのものの運営に翻弄せざるを得ない

という仕組み(日割りの報酬、利益負担等)があることは言うまでもありません。

でも、そのことを跳ねのけるためにも、地域との繋がりを後退させてはいけなし、その繋がりがなくしては、障害者問題の解決はないと考えています。

今日、多くの社会福祉法人その他の経営主体は、一定の自己資金を作り出したり、金融機関からの借り入れやリースにより、事業を立ち上げています。昔は、お金もなかったことも含め、何かといえど地域に足を運び、絶えず理解と協力を求め続けました。そのことは、自分たちの取り組みを検証し、厳しい意見もお聞きしながら、たくさんの方の困難を乗り越え、力をつけるとともに、多くの人たちを応援者として迎えました。

グループホームをつくる会では、昔多くの作業所が取り組んできたことを今日おこなっています。現在、目標額6600万円の66%である4400万円の到達となりました。約2年の息の長い取り組みです。やり切れるかどうかは不安ですが、当事者の頑張りには、必ず周りを動かすこと。地域には純粋に受け止めていただける人が多くおられ、打てば響くこと

が核心になっています。

あみの福祉会が法人認可となり、事業所を開放して地元の小中学生を対象に「夏休み体験教室」を開催して20年近くになります。陶芸教室では、仲間(当事者)が講師となり作品作りをされています。教室に参加したある子どもさんが、その仲間を地域で見かけて、母親に「あの人誰か知ってるか?」と尋ねたそうです。返答に母親が困っている。「あの人は陶芸の先生やで!」との返事に驚ろかされたとのこと。地域で生きるとは、「こうありたいな」と思わされるエピソードでした。

日頃の関わりが地域の“障害者観”を変えます。そして、自分のことと結び付けて障害者問題を考えられるようになります。でも、放っておいては変わらないし、必ず後退します。

「コナも落ち着いてきました。地域と繋がる仕掛けを意識的に作る手立てが必要です。神戸のある法人は、震災後ボランティア団体を立ち上げ、地域の諸課題に取り組んでいるとお聞きしました。

夏祭りやフェスタ、バザー等、運動の視点で復活してほしいです。

最後に、「障害者問題を社会問題としてとらえ、権利保障の立場か

ら、国民的な実践課題にすえる(「障害者の生活と教育」大泉博著)……。もう40年も前の学生時代に学んだ言葉が今も脳裏にやきついていきます。「権利保障」「発達保障」という言葉もなかなかお目見えしなくなりました。今日この頃ですが、この視点無くして障害者福祉の未来は描けません。

今回のグループホームづくりもその視点で、いよいよラストパートです!

引き続き、「理解・協力」をよろしくおねがいします。ありがとうございました。



設立総会で語る仲間代表



365歩のマーチ



37 大きくなった、のに…

3歳児クラスがはじまりました。

*

4月、新年度がはじまりました。3月から「たんぽぽさんになんねん」と一つ上のたんぽぽクラスに憧れていました。朝の登園時、朝さんぽをしている近所のおばさま二人と手を振り合うのが日課のゆいちくん。お互いに姿が見えなくなるまで手を振っています。3月までは家から保育園までずっと抱っこだったのに、「(4月から)たんぽぽさんだし、歩いて行ったらおばちゃんたちびつくりするんちゃう？」と提案してみると、たんぽぽクラス初日から一人で歩いているの登園することになりました。二人のおばさまは「えー歩いてるの!?!」とほめてくれ、ゆいちくんもまんざらではありません。登園前から自信満々の

原稿の締め切りを過ぎた4月11日の晩ごはん。父が納豆を食べていると「ゆいちくんも食べたーい!」とゆいちくん。冷蔵庫から自分で取ってきてトレイを開けます。フタをビリ、ビリ、勢いあまってトレイの皿部分も破ってしまいました。がーん!という残念な効果音が聞こえてきそうな雰囲気。ゆいちくんになるとこの世の終わりにも思われる絶望的な事件が起きました。

悔しそうに足を出してきます。やり直すのも、できなかった自分を認めることになるのか、つらそうです。「だっこしといて…」としばらく母の抱っこで気持ちを落ち着かせてから、新しい納豆を持つてきました。「やじるしを開けんねん」と母に教示してもらいながら再挑戦。「さつきゆいちくん、ここからやろうと思つたの」と小さなからだで大きなプライドを携えながら今度は慎重に開けていきます。失敗しないでよ…また失敗したら目も当てられない!」とドキドキしながら見守る母と父。そんな心配をよそに、無事開けるとができました。自信を取り戻したゆいちくんは、「かけてあげる」、と母の納豆にもからしをかけようとして自分のズボンが真っ黄色に。自分の納豆にたれをかけようとして飛び跳ねてしまいましたが、「つぎはずぼんがぬれました!」とトレイの無残な破壊に比べると

こんな失敗は苦にしません。3歳8か月、大きくなってなんでもできると思つている自分と、思つたようにいかない現実との間で揺れています。

ついでにさつきまで、「今月号に書くことがない」と頭を抱えていた父は、納豆事件の一部始終をメモしながら温かく見守っていました。

安藤史郎(あかこわびの園)

あんどつしろう

京都市在住。大阪の寝屋川市にある児童発達支援センターで発達相談員として働いています。子育てを通して、パートナーや自分の価値観と向き合いながら四苦八苦。ひゅうまん京都の編集もお手伝いさせてもらっています。



知っ得情報

有料道路の障害者割引少し改善

代表委員 松本 美津男

有料道路の障害者割引が、3月27日から見直し実施され一人一台要件の緩和とオンライン申請が可能になりました。

これまでは事前登録された自家用車に限り割引が適用されていましたが、自家用車を持っていない人も、知人の車やレンタカーを利用する場合や、介護が必要な障害者がタクシーや福祉サービス事業者の車両を利用する場合など、事前登録がない自動車でも新たに割引の適用となります。

あわせて、これまで市区町村の福祉事務所等で事前登録手続きしていた、自家用車を事前登録のうえETCを利用申請していた人を対象に、窓口に行かなくても申請できるよう、オンライン申請が導入されました。このオンライン申請は次のURLからスマートフォンで手続きをすることになります。

<https://www.expressway-discount.jp/>

詳細は、NEXCO西日本のホームページをご覧ください。

〈問い合わせ〉

利用する有料道路を管理する会社等

(NEXCO 西日本お客さまセンター 0120-924-863)

各福祉事務所・市町村担当課



あなたもぜひ
仲間に

サロン・サークル・地域活動展開中
生活支援スタッフ(資格不要)募集中
介護職員(資格要)募集中

ひとりぼっちの高齢者をなくそう
元気な高齢者はもっと元気に

「よろず相談」承ります(随時)



あなたも支える存在に
京都市北区紫野東野町1-5
電話075-432-3636

命の平等をかけた、
無差別平等の医療と
福祉の実現をめざす

働くひとびとの医療機関です

看護師・薬剤師・医師や医療技術者を

目指す方をご紹介します



京都民主医療機関連合会

〒615-0004 京都市右京区西院下花田町21-3 春日ビル4階

TEL 075-314-5011(代) FAX 075-314-5017

Home Page <http://www.kyoto-min-iren.org>

e-mail: info@kyoto-min-iren.org

ありがとうございます

会費 京都府北部障害者問題連絡会 分担金 京都府北部障害者問題連絡会

(敬称略 2023. 4. 10)

障害のある人の家族の思い

前号でいつ終わると期限のない介護が続いていく不安な思いがたくさんあることを紹介しました。具体的には以下のような意見が複数の方から出ています。

これらの不安な気持ちは時代が変わっても同じだと感じます。どうすればこれらの課題を具体的な解決へと向かうのか考えていく材料になればと思います。

- ・介護者の体調が悪い時など、急に預けられるところがあるか知りたい。
- ・医療的ケアが必要な人を預けることができるところがない。
- ・一晩でも預かってもらえるところが欲しい。
- ・預かってもらったとしても、身体の緊張が強く、硬くなって帰ってくると思うと心配である。
- ・各地で災害が起こっているの、いざという時、心配である。福祉避難所ができるのに一週間くらいかかると聞いている。
- ・家族は高齢で助けてもらうことは難しい。
- ・終の棲家と思い、グループホームに入居したが経営難で、開設日数が減り、週末帰宅できない人は入所されていく。隣の滋賀県では青森や北海道に施設入所されているという現実も聞くので、今後のことが心配である。
- ・将来的に施設に入ることになるのだろうか。
- ・入所施設を自分で探さないといけないのだろうか。
- ・親亡き後のことなど聞くと「怖い」という思いで焦ってしまう。
- ・重度の子どもの入れるグループホームができてほしい。
- ・看護師が必要な人が入居できるグループホームが欲しい。

「気楽にお話ししましょう会」呼びかけ人 沖田 友子